

真脇遺跡に関する年表

1962年	土師質土器（製塩土器）が発見される
1980年	真脇地区で農村基盤総合整備事業策定（圃場整備）
1981年	平地全域で遺跡分布調査
1982年	第1次発掘調査
1983年	第2次発掘調査 出土品の整理に着手
1985年	出土品展示室を設置
1986年	能都町指定史跡
1987年	石川県指定史跡
1988年	出土品が能都町指定文化財
1989年	国指定史跡（37,599.94㎡）
1990年	出土品が県指定文化財
1991年	出土品219点が国指定重要文化財
1996年	9月17日に天皇・皇后両陛下が出土品をご覧になる 真脇遺跡縄文館が開館
1997年	史跡公有化事業完了
1998年	調査指導委員会・発掘調査団を組織 第3次発掘調査
1999年	第4次発掘調査（人形ペンダント出土）
2000年	第5次発掘調査（板敷き土墳墓が出土）
2001年	第6次発掘調査（把手付土製ランプが出土）
2002年	第7次発掘調査（環状木柱列の木柱根確認。魚形石製品が出土）
2003年	第8次発掘調査（環状木柱列の全容判明）。8月2日に皇太子殿下が来館
2004年	真脇遺跡体験村が完成 第9次発掘調査
2005年	第10次発掘調査
2006年	第11次発掘調査（貼床住居跡の全容判明）
2007年	第1期史跡整備事業に着手。第12次発掘調査
2008年	第13次発掘調査
2009年	第14次発掘調査
2010年	第15次発掘調査
2011年	第16次発掘調査 第1期史跡整備事業が完成。環状木柱列、板敷き土墳墓を復元

全国に類を見ない、四千年にわたる長期定住型集落遺跡

「縄文文化の宝庫」と呼ばれる真脇遺跡。1982年、その姿は突然現れた。遺跡発見から発掘調査まで、関係者は驚きの連続だったという。

62年の石川県教育委員会の調査で土師質土器※が出土し、「真脇土師遺跡」として石川県遺跡地図に登録されていた水田地帯に80年、圃場整備事業の計画が明らかにされた。

当時宇出津高校教諭の山田芳和さんⅡ波並Ⅱは、顧問をしていた同校郷土史部の生徒らと共に、圃場整備工事に先立つ遺跡

分布調査（試掘調査）を行った。「弥生式土器が出ると思ってた。掘ったら縄文土器が出て驚いた。最初は信じられず、周りの丘陵地から流れてきたものかと疑った」と山田さんは当時を振り返る。

翌82年と83年に実施された緊急発掘調査（第1次、第2次発掘調査）によって、それまでの縄文遺跡の常識を覆す驚くべき発見が相次いだ。

真脇遺跡は、縄文時代前期初頭（約6千年前）から晩期終末（約2500年前）までの4千

年間集落が存在した、全国でも類を見ない長期定住型遺跡であることが分かった。

発見された出土品や遺構も多種多様だった。▽トーンポールと呼ばれる彫刻柱▽北陸地方特有の環状木柱列▽全国に類例がない板敷き土墳墓や貼床住居跡▽大量に見つかったイルカの骨―など、まさに「縄文文化の宝庫」として、全国屈指の重要遺跡という評価がなされた。

89年に国指定史跡。91年に出土品219点が国指定重要文化財として指定された。

遺跡周辺にはこれまで、温泉、宿泊施設、博物館、体験館などを整備。今回、07年からの第1期史跡整備事業で環状木柱列と板敷き土墳墓が復元された。

第一期史跡整備が完成 「環状木柱列」の復元を祝う

縄文の里に新たなシンボルが誕生した。国指定史跡真脇遺跡の第1期史跡整備事業の完成式典が11月9日、真脇小学校体育館や同遺跡で開かれ、関係者が環状木柱列や板敷き土墳墓の復元を祝った。

環状木柱列は半割りの木柱が環状に並べられた約2800年前の遺構。復元では、発見された木柱根と同じ場所に高さ7メートルのクリ木柱10本を直径7メートルの環状に配置した。

約4500年前の遺構である板敷き土墳墓は、埋葬された人骨や同時に発見された3本の木柱を含めて復元された。

式典には教育関係者や考古学関係者、施工業者ら約80人が出席。持木町長は「今後も第2期整備に向けた準備を進めていきたい」と式辞を述べた。

式典後は木柱列前でテープカットが行われ、新たなシンボルがお披露目された。



【右】真脇小学校で行われた式典では、真脇小児童らが鼓笛の演奏で完成をお祝した。
【左】テープカットの後に披露された「高倉子ども太鼓」。木柱列の前で元気いっぱい太鼓を響かせた。

真脇遺跡は縄文時代の教科書。 その特色をしっかりと伝える 資料や冊子が必要。



能登町文化財保護審議会
山田芳和会長

真脇遺跡ほど調査員に戸惑いと狂喜と畏敬の念を与えた遺跡はないでしょう。一点の土器片すら見つかっていなかった地域に突如として出現した真脇遺跡は、その発見から常識はずれの遺跡でした。

昭和57年からの調査では、下の地層を掘ると新しいものが出てくることの繰り返し。土器型式で23型式、4千年にわたる縄文人の生活の跡が密封されているとは予想もして

いませんでした。

低湿地帯での発掘は、わき出る水との戦いでしたが、調査が順調に進んだのは、考古学に関心を持った人が地元が多かったからです。宇出津高校郷土史部とそのOBが果たした役割は、決して小さくありません。

全国屈指の重要遺跡であり、縄文時代の教科書とも言える真脇遺跡の特色を、分かりやすく、しっかりと伝える資料や冊子が必要です。

史跡整備完成を記念して地域住民らが「丸太曳祭り」を開催



【写真】地元住民約 50 人が参加。史跡エリア入口に立てる長さ 4.5 ㍎の木柱をポーレポーレから力を合わせて引いた。



今井和人さん
Imai Kazuhito = 姫

姫地区と真脇地区の人たちで、地域のために何かできることはないか考え、昨年夏に体験館前広場で盆踊りをしました。

その後、高田館長から史跡整備に使う柱を立てないかという話があり、どうせやるなら子どもからお年寄りまで楽しめるイベントにしようと昨年 12 月に「丸太曳き祭り」を実施しました。今回は 2 度目で

急な呼び掛けでしたが、たくさんの人が参加してくれました。

子どもたちは、全国どこに行っても「出身は真脇遺跡のある場所」と言えます。少しでも真脇遺跡に関わることで興味を持ってもらい、地元に誇りを持ってほしい。そして、将来地元に残ってくれる、戻ってきてくれる子どもが増えればと思っています。

環状木柱列・板敷き土墳墓とは――

縄文時代晩期の地層から出土した環状木柱列は、北陸地方にだけ出土する特殊な遺構。

- ①クリ木を使用
- ②丸太ではなく芯の部分を除いたかまぼこ状
- ③平らな部分が外側
- ④入口と見られる扉状の部分
- ⑤同じ場所で何度も立て替えられる

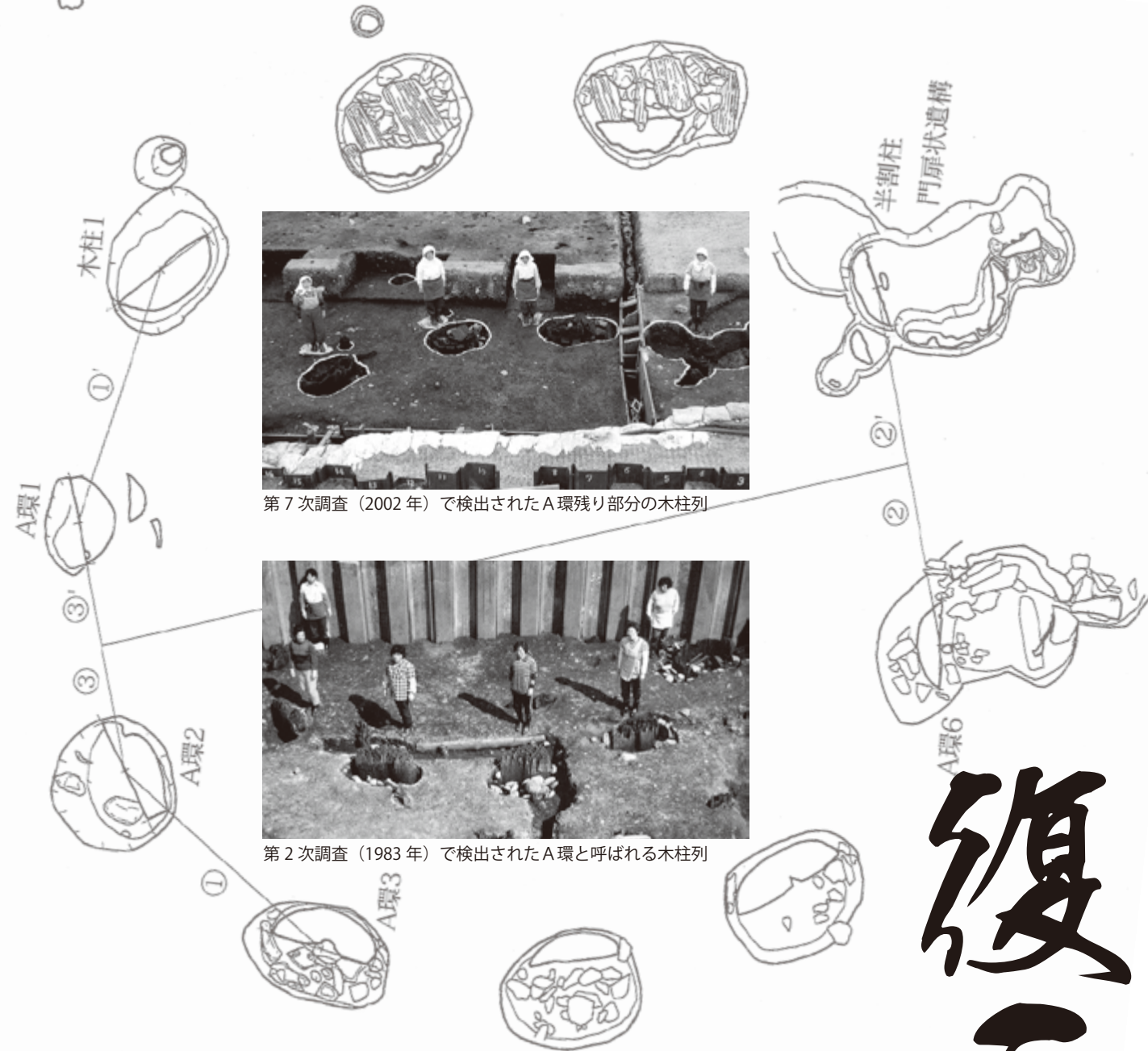
真脇遺跡では、少なくとも 6 回の立て替えが認められ、縄文人にとって「聖なる場所」であったと考えられている。

構造や目的は不明のままだが、柱列の中に炉や墓坑がなかったことから、何らかのマツリを行う施設だったのではないかと考えられている。

板敷き土墳墓については、7 ㍎に詳細を記載する。



強化プラスチックで人骨まで復元された 4 基の板敷き土墳墓



第 7 次調査（2002 年）で検出された A 環残り部分の木柱列



第 2 次調査（1983 年）で検出された A 環と呼ばれる木柱列

復元

国内最大規模の復元となった「環状木柱列」。そびえ立つ 10 本の柱は、これまでの 30 年間、真脇遺跡に関わった多くの研究者、技術者、地域住民の知恵と努力の結晶だ。

「単なるレプリカではなく、できるだけ本物に近い木柱列を復元したい」

真脇遺跡縄文館の高田秀樹館長（町教育委員会事務局）は、環状木柱列復元に込めた思いを語る。

これまで復元された環状木柱列は、金沢市チカモリ遺跡と富山県小矢部市桜町遺跡の 2 カ所。この 2 例を参考にしながらも、材料や大きさをより本物に近づける復元が計画された。

しかし、国内で直径 1 ㍎を超えるクリ木は入手困難。計画から 2 年後の 09 年 7 月、岩手県一戸町の協力を得て、同県葛巻町内の直径 60 ㍎前後のクリ木 18 本を購入することができた。

原木が細いため、木造船製造で使われていた寄木技術に応用することになった。さらに各工程でさまざまな実験を行い、縄文時代の技術を検証した。

「当時の道具を使えばクリ木にどんな痕が残るか分かる。道具の痕まで復元したかった」

実験には首都大学東京の山田昌久教授が全面協力。地元住民にも参加を呼び掛けながら、3 年がかりの作業が行われた。

復元された木柱列の構造は、さまざまな分析を基に検証した結果、高さ 7 ㍎の柱のみとなった。しかし、その目的や上部の正確な構造などは謎のまま。

その謎に近づこうと、04 年 12 月に開催されたシンポジウム。そこに参加した國學院大の小林達雄教授（当時）は、最後にこう見解を述べて締めくくった。

「規模が大きいのに、よく分からないということが実は重要な性質なのです。つまり、腹の足しになるのではなく、心の足しになるもの。▽まん丸の円であること▽柱が 10 本あること▽柱を縦割りすること▽クリ木を使うこと――などのそれぞれが縄文人の世界観を構成する要素になっているのではないか。縄文人の心に接近する『鍵』を隠しているのが環状木柱列ということになるでしょう」

木柱列復元の記録

忠実な復元を目指して実施されたさまざまな実験



【木柱制作作業】直径 1 ㍎近い巨大木柱列の制作には、木造船製作の寄木技術が駆使された。地元真脇の元船大工、川端栄一さんの協力を受けて、こだわりの木柱列が完成した。



【クリ木加工実験】半割実験で割ったクリ木を復元した磨製石斧で加工。幹の横方向に溝を数本掘り、溝を除去した。91 分 25 秒で 4,573 回の打撃を加えた。



【クリ木半割実験】口径 60 ㍎、長さ 8.3 ㍎のクリ木の木口にくさびを打ち込み、割れ口を広げていく。ある程度広がったら横からくさびを打ち込んだ。所要時間 53 分 47 秒。



【クリ木皮むき実験】クリ木の枝を使って皮をむき、所要時間と皮の重さを記録した。皮むき後は縄文館駐車場横に仮設された池で約半年間水漬けされた。



【クリ木伐採実験】首都大学東京山田昌久教授と御所野縄文博物館（岩手県一戸町）の協力、岩手県葛巻町内のクリ木（樹齢 78 年）を伐採。石斧で 4,339 回打ち込んだ。



土製仮面

【土製仮面】

今から約 4,000 年前の後期前葉の気屋式期のものです。右顔面と顎が欠けていますが、復元すると長さ 16 cm、幅 13 cm となります。目はつりあがり、眉と鼻が高く、顔面に入れ墨または化粧と思われる沈線文が施されています。



【魚形石製品】

緑色凝灰岩を使い、底面が平らで、縦断面が三角形です。両側面には目とエラ、先端に口が表現されています。かつお節形の石冠の一種と考えられます。



【人形ペンダント】

滑石を「擦り切り技法」により加工し、ひもを通す穴を横から開けています。長さ 5.9 cm、幅 3.8 cm あり、上から見るとセミのような形をしています。2・3 点の類例しかありません。



【板敷き土墳墓】

縄文時代中期前葉から中期中葉にかけて、厚さ 30 ～ 50 cm に整地した地層に、4 基の土墳墓が検出されました。4 基の内、1・2・3 号土墳墓の底に大きな板が敷かれていたことから、『板敷き土墳墓』と呼ばれています。土墳墓の平面形は不整楕円形で、長径 140 ～ 150 cm ・短径 100 ～ 130 cm ・深さ 35 ～ 50 cm で、ほぼ東西南北の方向に配置されています。3 号土墳墓には骨が遺存していました。頭骨は左向きで足を強く曲げた状態（横臥屈葬）で埋葬されていました。歯列の構成や咬耗（歯のすり減り）の程度、下肢骨の大きさなどから、壮年期（20 ～ 30 代）の男性と推定されています。放射性炭素年代測定法の結果から 4,520 ～ 5,200 年前に作られたものと考えられます。当時の集落の中心に位置し、ムラのリーダーが埋葬されたものと考えられます。

真脇縄文人が遺した宝物



【お魚土器】

今から約 5,000 年前の真脇式土器の深鉢です。魚が口を開けて上を向いているように見えることから、「お魚土器」というニックネームが付いています。平成 3 年石川国体の炬火台のモデルにもなりました。さらに 1998 年にフランスのパリで開催された縄文展に出品されました。



【把手付土製ランプ】

全長 15.2 cm、最大幅 6.1 cm、高さ 3.4 cm で底部はほぼ平らで片側に把手が付いています。縄文時代中期中頃の上山田式土器で、口唇部と内面底部にすすが付着していることから、ランプとして使用されたものと思われます。



【鳥さん土器】

今から約 5,000 年前の新保式土器の浅鉢です。ご飯茶碗ほどの大きさの土器に鳥の頭を付けています。目とくちばしの先が赤く彩色され顔を少し傾けて、何かを語りかけているように思えます。



【5号炉の土器】

今から約 4,500 年前の古府式土器の深鉢です。縄文時代中期後葉の住居跡の 5 号炉内に敷かれていました。復元すると高さ 63 cm、口径 64 cm で容量が 88 l もあります。



真脇遺跡縄文館
高田秀樹館長

真脇遺跡にふさわしい 史跡整備ができた

この度、真脇遺跡第1期史跡整備事業を終えることができました。関係者の皆さまに厚く感謝申し上げます。

1982年に始まった発掘調査から実に30年の時間を要しました。98年から史跡整備のための発掘調査を再開し、10年後の07年から第1期史跡整備事業を5年間実施して、ようやく完成となりました。

特に晩期の環状木柱列の復元は、多くの課題を乗り越えて、真脇遺跡にふさわしい内容になったと思います。

真脇遺跡の事業は 新しいステージへ

今回の整備完成で真脇遺跡の事業が終わった訳ではありません

ん。今後数年は発掘調査を継続して、第2期整備事業に必要なデータを集積することになります。真脇で見つかっている貼床住居跡の中には、全国に例のない住居跡もあります。今後の調査で真脇縄文集落の解明を続け、その成果を全国に向けて発信していきます。

また、ハード事業として史跡を整備するだけでなく、地域の活性化や子どもたちの学習につながるようなイベントなどを地域の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

縄文を深く学べる遺跡へ

史跡の整備によって、隣接する真脇遺跡縄文館と体験村との連携でより深い学習活動が可能になりました。これだけ施設内容が充実している遺跡は県内では例が無く、全国的にも多くはありません。

これらを活用し、これからも真脇遺跡の魅力を全国に発信していきたいと思います。今後も真脇遺跡にご理解とご協力をお願いします。



元文化庁主任文化財調査官

土肥 孝さん
Doi Takashi

真協遺跡は、百年単位で追求されるべき貴重な遺跡。第1期整備は最初のステップであり、これからも動き続けることが遺跡の保護・活用につながる。

真

協遺跡第1期史跡整備事業の完成おめでとうございます。遺跡発見時からの調査、そして重要文化財指定作業に携わった者として、その完成は感慨深いものがあります。

真協遺跡がほかの縄文遺跡と大きく異なる点は二つです。一つは、縄文時代前期から終わりまで、四千年間途切れることなく続いた集落遺跡であることです。長期間継続する遺跡は瀬戸内海地域にも存在します

が、いずれも規模は小さく、「集落の継続」という点では真協遺跡が唯一と言つても過言ではありません。さらに遺物も多量・多種・多様であり、一つの遺跡で縄文時代の推移を「定点観測」できる所は真協以外にありません。この長期定住を支えたのは「イルカ漁」です。真協に「漁業発祥の地」を冠しても何ら問題がありません。

真協遺跡は、イタリアのポンペイや奈良の平城宮のように、百年、二百年単位で追求されるべき遺跡です。幸いにして、出土品は遺跡地域以外に持ち出されていません。ここに来なければ「真協遺跡」を見ることができないのです。これだけ貴重な遺跡を検証・保護・活用し「地域を発信」するためには、まず地域の人々が真協遺跡に対して誇りを持ち、行動しなければなりません。幾世代の継続を通して、遺跡の価値は花開くのです。



専門家が語る

価値と課題

平成23年度の能登町顕彰条例に基づく表彰式が11月3日、能都庁舎大集会場で行われ、地方自治や公共・産業の発展に多大な貢献をされた3人が表彰を受けました。



山崎元英さん

やまざき・もとひで(71) 〓 小木

【自治功労】

山崎さんは、昭和46年に内浦町議会議員に初当選。平成17年3月の町村合併後も引き続き能登町議会議員として、平成22年10月までの連続10期、通算39年6カ月という長きにわたって地方自治と町政発展に貢献されました。

この間、内浦町議会議長、能登町議会議長、内浦町議会土木常任委員長、能登町議会総務常任委員長などの要職を歴任しました。内浦町議会運輸問題対策特別委員会委員長としては、町営バス駒渡線の整備を進めたほか、内浦町議会・石川国体対策特別委員会委員長として、平成3年開催の石川国体の誘致や施設整備に尽力されました。



中谷喜久さん

なかたに・よしひさ(77) 〓 柳田

【公共・産業】

中谷さんは、昭和51年から栗栽培を開始。自家生産堆肥による土づくり、尿素の葉面散布など、栽培管理に工夫を凝らし、技術力の向上に努めました。平成12年から18年にかけては、石川県くり生産振興会柳田支部長として、技術普及に貢献しました。

平成5年から21年まで、珠洲道路沿線約4kmにサルビア約4万本を植栽・管理。「サルビアロード」として観光客から好評を得るようになりました。風雨酷暑にかかわらず、献身的にサルビアを管理する中谷さんの情熱は、地元住民から尊敬を集め、環境美化や町の印象を向上させました。



数馬嘉雄さん

かずま・よしお(58) 〓 宇出津

【公共・産業】

数馬さんは、平成3年に能都町商工会理事に就任。平成6年5月から18年3月まで能都町商工会会長、平成18年5月から23年5月まで能登町商工会会長を務められ、平成20年6月から23年5月にかけては、石川県商工会連合会副会長を務めるなど、その絶大な指導力と行動力によって、会員からの信頼も厚く、町の地域振興と経済の発展に貢献されました。

また、能登の発酵文化「いしり」を米国ニューヨークの展示会において紹介し、現地で好評を得るなど、新分野の開拓にも努力されるなど、広範囲で活躍されています。

能登町

顕彰条例に基づく表彰